

Title	労働の二重性とその展開
Sub Title	
Author	遊部, 久蔵
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1948
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.41, No.1/2 (1948. 2) ,p.1- 18
JaLC DOI	10.14991/001.19480201-0001
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19480201-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

高橋誠一郎著

A五判 價三二〇圓 一五五圓

經濟學史略

(新刊)

「本書は、著者が是れ迄公にした經濟思想史及經濟學史に關する可なりな數多い著作及論稿の中から、抜撰補填して西洋經濟學發達の概略を叙し、併せて之れが我が國傳來の跡を顧眄しようとしたものである。」(序文の一節)斯くの如く、本書は希臘・羅馬の太古から、經濟學傳來の跡を辿つて、官房學者・重農學派の前驅的理論より、巨星アダム・スミス現はれてマルサス、リカドオ、ミルの絢爛たる古典學派の開花となり、一方、初期佛蘭西のそれよりラサール、マルクスの科學的のそれに至る迄の社會主義を檢討して、講壇社會主義、基督教社會主義に及び、限界效用學派、埃太利學派、數理學派の三大學的財とそれを相續した現代經濟學に到り、終の一篇はフィッセルング以來の西洋經濟學の日本移植とそれの今日迄の發展を叙して筆を收めた。本文五五七頁、書名註一六頁、人名索引一一頁、學界多年待望の高橋先生の一貫せる經濟學史は遂に出來た。

慶應出版社

・勞働の二重性とその展開

遊部久藏

(一)

「二者の分裂とその矛盾に満ちた部分の認識とは辯證法の眞髓である。」(註一)とレーニンは述べている。蓋し自然、精神及び社會のあらゆる現象や過程を對立物の統一として、即ち相互に矛盾し排除し合う對立的傾向として認識することこそ、世界の一切の道程をその「自己運動」において、その自生的發展において認識するための前提であるから、換言すれば、「發展は對立の『闘争』である。」(註二)から、である。

そして「近代社會の經濟的運動法則を暴露すること」をその「最後の窮極目的」とする「資本論」は先ず商品の分析を以て端緒する。何故なら資本制社會にとつては勞働生産物の商品形態或いは價值形態が經濟的な細胞形態——この社會における生産の最も一般的な且つ最も未展開な形態——であるがゆえに「資本論」の端緒をなすが、これよりの敘述は商品の分析によつて得られた最初の對立物の統一の運動過程、生長過程を追求せるものに外ならぬ。要するに端緒としての商品分析のうちに鏡に照らす如くに現代社會の一切の矛盾がその萌芽形態において明らかにされているのである。かくして「近代社會の經濟的運動法則」は自己運動として、矛盾に充ちた相互に排斥し闘争し合う對

勞働の二重性とその展開

一 (一)

立物の統一過程(運動過程)として把握されている。いわゆる「価値法則」とは實にかくの如き意味での「資本論」全三巻をつらぬく根本的運動法則、一本の赤き糸を指すべきである。「資本論」全體はかゝる意味での価値法則の辯證法的發展を追求したものである。価値法則は決して今日まで誤まり解されたかの如き、單なる商品價值論(「資本論」第一卷第一節第一章特に第二、二節)を指すものでもなければ、もとより労働價值論の一種を稱するものでもない。したがつて價值法則をば通常の經濟學における如き價值論と同一の方法的意義(全經濟理論の出發點、前提、基礎)に解したり、ましてやそれをスミスリカードオ流の労働價值論と同一の理論的平面に於いて論ずるが如きは全くの虚妄の説である。いまこの點を詳論するいとまはないが、辯證法的經濟學としての「資本論」の特殊な方法的立場は今日においても否却して今日においてこそ一層強調力言される必要がある。(註三)

さて端緒として商品とくにその交換關係がとられたが、この分析によつて得られた最初の對立は周知の如く使用價值と交換價值との對立であり、そして分析がすすむにつれて交換價值は價值の現象形態であることが判明しかくして根本的對立は使用價值と價值との對立として先ず定立される。だがこれは商品分析の第一段階である。(第一卷第一篇第一章第一節、商品の二要因——使用價值および價值)分析は更にすすむ。かくして統一物としての商品の分析によつて得られた使用價值と價值との對立は實は使用價值をつくる具體的・有用的労働と價值をつくる抽象的・一般的労働との對立との表現にほかならぬことが檢出される。(同、第二節商品で表示される労働の二重性)——尤も敘述の上では労働の二重性の檢出は部分的には第一節においても行われており、またこの敘述の順序は研究の順序と並行していることがあらためて注意されるべきである。(註四)

労働の二重性の發見の劃期的意義についてはマルクス自身各所で述べている。先づその彼の學說體系の上で占める重要性については次の如く述べられている。即ち「資本論」の労働の二重性の節の冒頭において「商品に含まれている労働のかかる二者鬭争的な本性は、私により初めて批判的に證明されたものである。この點は經濟學を理解するための樞軸であるから、ここに、より詳細に闡明することとしよう。」(註五)エンゲルス宛一八六七年八月二四日附書簡(「資本論」第一版刊行の年)において「僕の著書における最良の部分は、(一)諸事實の徹底的理解は、この上に立たなければ不可能である。(註六)またエンゲルス宛一八六八年一月八日附書簡において「資本論」或は交換價值として顯現する——である。(註六)またエンゲルス宛一八六八年一月八日附書簡において「資本論」のもつ「三つの根本的に新しい要素」の一つとして、労働の二者鬭争性をあげ、「實にこの點が批判的見解の全秘密である。」(註七)とも云つている。

また労働の二重性の發見定立の經濟學史上における意義については「經濟學批判中において次の如く論ぜられている。曰く「商品を二重の形態の労働に分析すること、すなはちその使用價值を現實の労働または合目的な・生産的な・活動に、交換價值を労働時間または平等な・社會的な・労働に、分析することは、古典經濟學——イギリスにおいては李嘉ム・ベティに、フランスにおいてはボギューベールに始まり、イギリスにおいてはリカードに、フランスにおいてはシスモンディに終りし古典經濟學——の二世紀半以上に互れる諸研究の批判によつて得られた終局的結果である。」(註八)そして古典經濟學の根本的缺陷を労働の二重性についてうすうす感付いてはいたが、これを自覺的にとりあげなかつたことであると述べている。即ち「價值一般に關して云へば、古典經濟學は、價值において表示される労働をその生産物の使用價值において表示されるかぎりでの同じ労働から、何所においてもはつきりとは、且つ明白な意識をもつては、區別してゐない。それは、もちろん、この區別を事實的にやつてはゐる、といふわけは、

それは労働をば、時には量的に、時には質的に考察してゐるからである。だが、それが氣づかなかつたことは、諸労働の單に量的な區別は、それらの質的な統一あるひは同等性をかくして抽象的、人間的労働へのそれらの還元を、前提するといふことである。」(註九)

かくしてマルクスは古典經濟學が自覺的にはとりあげ得なかつた労働の二重性をはじめて意識的に自己の經濟學體系の據つて立つ基礎として採用したのであるが、かゝることが可能であつたのは、先ず商品の二因子の分析において使用價值と價值との對立をギリギリのところまで追いつめて、例えば使用價值をば商品體と看做すが如くに、これをその論理的尖端に於いて把え得たからである。(註一〇)されば古典經濟學が労働の二重性を確立し得なかつたのは初發において商品の二因子を明確に對立においてつかむことができなかったからである。(註一一)

こゝに労働の二重性の發見、定立(及びこれに基く資本主義社會の經濟的運動法則の闡明)のかゞやかしい意義があらためて確認されねばならない。それはまさにコペルニクスの地動説やニュートンの引力の法則にも比すべき經濟史上の劃期的發見であつた否それにとゞまらず、それによつてはじめて共產主義は「プロレタリア解放の條件についての理論」(註一二)たり得たのである。エンゲルスは云つてゐる。「一、二大發見、即ち唯物史觀と、剩餘價值に依る資本家的生産の秘密の暴露とは、實に我々がマルクスに負ふ所である。社會主義は之に依つて一個の科學となつた。」あとは只主として、その細目と諸關係とを完成するだけの事であつた。」(註一三)そして剩餘價值の理論が労働の二重性の定立にその直接の基礎を有することは後論(第三節)にみる如くである。

(註一)「哲學ノート」、廣島・直井雨氏譯、三四一頁。
(註二)同上、三四二頁。

(註三)價值法則をかくの如く廣義に「資本論」全體の研究對象たる「近代社會の經濟的運動法則」と解することは今日ま

で全く何びとによつてもなされなかつたところである。それは單に「資本論」劈頭の商品價值論として狹義に解されているにすぎぬ。エンゲルスがそうである。「資本論」第三卷序文、及び「資本論第三卷補遺」(參照)マルクス自身においてもこの點は文章の上で明確ではない。彼はかの有名なクーゲルマン宛一八六八年七月一日附書簡において「科學は、價值法則が如何に自らを貫徹するかを説明することのうちに、正に成り立つ。」(マルクス・エンゲルス全集、第二卷、七一頁)と云つてこれを運動法則として把え、劈頭の商品價值論によつて得られた法則は「價值規定」(Wertbestimmung)又は「價值法則」(Wertgesetz überhaupt)と呼び、「價值法則」(Wertgesetz)とは區別しているかの如くである。「價值規定」の語は例えば「資本論」第一卷第六篇第七章、第三卷第七篇第四九章第五〇章等に出ず、「價值法則」の語は例えば第三卷第六篇第三十七章に出ず、(が彼はまた同時に他の箇所でも單純な、未發展の段階にある價值法則——即ち價值規定と本來呼ばるべきもの——をとくにことわらずに價值法則と呼んでおり、そのことは多くの引用によつて示しうる。(例えば第三卷第二篇第一章)しかしかゝる場合におけるそれは決して固定的な定義にとどまる如きあるいは基礎、前提、擬制の如き意義での價值法則ではなく、たえず發展進化する法則の未發展の段階にあるものとしての意である。されば我々は一般にこの語に接したとき、

労働の二重性とその展開

かくの如き全體的發展法則乃至はその最初の規定として解すべきである。(繰返して云えば價值法則の最初の段階が價值規定である。)なおこの點に關する文義的、學說史的穿索は別稿に期す。

(註四)労働の二重性は第二節で詳論されているが、それは第一節においてもすでにしばしば「蒸溜法」によるといわれる商品の箇所において論ぜられてゐる。即ち商品からその使用價值を捨象すると、残るものはそれが労働生産物だといふ共通の屬性だけであるが、この労働生産物たるや一切の感性的形狀をおびた有形的價格が捨象されていゝしたがつて商品價值の實體(Substanz)としての労働は有形的價格の捨象され一切の具體的形態の消失した「抽象的・人間的労働」であるといふくだりを想起せよこゝにすでに使用價值との對立が労働の二者間争性の顯現に外ならぬことが暗示されている。またこゝでの敘述の順序と論理の順序とが逆行してゐることは云うまでもない。マルクス自身「もちろん、敘述の仕方は、形式的には、研究の仕方と區別されねばならぬ。」(「資本論」、第二版の跋)とこゝとわつてゐる。論理的には労働の二重性の檢出が商品の二因子に先行して定立されている。また使用價值と價值との對立にもとずいて、使用價值と交換價值との現象上の對立が見出されている。けれども敘述の順序は全く右と逆行し廻及法がとられてゐる。だが商品(資本的生產の細胞形態)における原初的對立

が労働の二重性であることは云うまでもない。なおこの點の論理的方法上の意義については、武市健人氏著「ヘーゲル論理學の世界」上巻、二二六頁以下参照。

(註五) 「資本論」、第一卷、長谷部氏譯、一八五頁。

(註六) 「マル・エン全集」、第一九卷、三八九頁。

(註七) 同、第二〇卷、一二頁。

(註八) 「經濟學批判」、河上・宮川兩氏譯、一二二頁。

(註九) 「資本論」、第一卷、前掲譯、二六九頁。

(註一〇) 三枝博音氏著「資本論の辯證法」、六二頁。

(註一一) しかるに安部隆一氏はスミスリカードの「客觀的價值學說」がすでに使用價值と交換價值とを對立においてとらえていると云つて彼等とマルクスとの絶對的隔絶に關してのべられていない。(註)使用價值について、「經濟思潮」第五集、昭和二年(一〇月)だがスミスリカードは使用價值と交換價值は價值との對立をわずかに水や空氣とダイヤモンドや金との間の如き例外的事例にみられる使用價值と交換價值との量的不適合として考察したにすぎない。即ちスミス氏曰く「最大の使用價值を有つものにして、往々、交換價值を殆ど又は全くもたないものがある、これに反して、最大の交換價值をもつものにして、往々、殆ど又は全く使用價值をもたないものがある。水ほど大切なものはないけれども、これを以ては何物も買ふわけにはいかない、これと交換には何物をも獲ることはできない。こ

れに反し、ダイヤモンドは殆ど何等の使用價值をもたないけれども、それと交換に、往々、他の貨物の大量を獲ることができ(註)。「國富論」、第一篇、第四章、岩波文庫譯、第一冊、六五頁)更にリカードは「經濟學及び課税の原理」第一章第一節冒頭において右のスミスの文句をそのまま引用し、水及び空氣と金とについて使用價值と交換價值との不比例を説き、「されば、利用は交換價值に取つて絶對的に缺くべからざるものではあるが、其尺度ではない。」(岩波文庫譯、七頁)と云つているにすぎない。使用價值と交換價值との對立を質と量、商品體と(一見偶然的相對的な)交換比率——窮極においては幻のような對象性たる抽象的労働價值との對立としてみることはもとより彼等のおもひよらないところであつた。そしてこのことを彼等をして労働の二重性の索出を怠らしめた所以である。

なお安部氏の右の論文は敗戦後あらわれた價值論關係の唯一のよみごたえある論文であるが、氏の主張たる使用價值即物觀は、かなり無理があり、マルクス經濟學の一歪曲である。いまこの點の詳細の批判は別稿にゆずるとして本論の趣旨を明かにする上に必要な程度に若干言を費すしよう。

ものが、一の使用價值あるひは財である。「(「資本論」、第一卷、一七三頁)と云つてゐる。そして安部氏の云われるように使用價值としての商品を考察するに際して先ず「商品はさしあたり、その諸屬性によつて人間の何らかの種類の諸欲望を充たすところの、一の外的對象・一つの物である。」(同、一七三頁)と述べてもいる。しかし以上の言葉は要するに使用價值が物をはなれては存しないということを強調するために力言されたにとどまり、使用價值が依然物の屬性によつて制約された效用であることを否定するものではない。この點、「資本論」からの前掲引用文の前後を熟讀すればわかる筈であり、また安部氏の批判された河上肇氏の見解の方がむしろ正しいように思われる。(「資本論入門」、第一分冊)されば使用價值は前述の如く效用として一面商品——物の側の諸條件によつて制約されつつ一面人間の側の諸欲望をはなれては存し得ない。それはいわばかくの如き意味において物と人間との間の關係を表現する。だからマルクスは云うではないか。「文義的觀察者」、ペイリー等は價值なる言葉は物に屬せる性質を表すものとなして居る。それは事實上元來は物の人に對する使用價值、即ち物をして人に對して有用且つ快きものたらしめる所の、物の性質以外の何物をも表現しない。、、使用價值は物と人との間の自然的關係即ち物の人に對する定有を表現する。」(「剩餘價值學說史」、第三卷、カウツキー版、第四冊、三五五頁、「マル・

エン全集」第一卷、三五三頁)特に最後の二句に注目せよ。Dergebrauchswert drückt die Naturbeziehung zwischen Dingen und Menschen aus, das Dasein der Dinge für die Menschen, 使用價值は定有であり、したがつて措定された有である。しからば措定するものは何か? それは物の諸屬性であり更に人間の諸欲望、換言すれば人間の諸欲望の對應關係におかれた物の諸屬性である。氏の如く使用價值即物觀に固執されると、商品價值の實體の索出に際して商品から使用價值を捨象することはとりもなおさず商品そのものを捨象することになりはしないか? 蓋し氏によれば使用價值は商品體、物そのものであるとして一義的にとられてゐるから。(ちなみにマルクスは「商品體の使用價值を捨象すれば」と云つてゐる。安部氏はこれを「商品體の商品體を捨象すれば」と讀まれるのか?)かゝる氏の見解を以てしては商品にふくまれた資本制生産の諸矛盾の原初形態としての二つの對立物たる使用價值と價值、及び労働の二重性は把握しがたい。したがつて氏もまた「價值法則」の展開を以て「資本論」の内容とみられるかのような口吻をもちすが、しかもそれを結局簡單な商品價值の規定と解するらしく、この結果使用價值が絶えずこの價值法則の展開の一方の極に立つことが見落されてゐる。(一一一、一一三頁)氏はすゝんで使用價值を物とみることによつて主觀的價值學説はくつがえるし、その客觀的價值學説——マルクスの體系も氏によ

つてこれに編入されている——に對する批判もよくあらためて再出發しなければならぬと斷じているが(二二〇頁)、そうではなくして主觀的價值學說の誤謬は使用價值と(交換)價值との對立性を最初からみとめず兩者を調和——使用價值による(交換)價值の説明——せしめるべく試みた點にある。總じて安部氏に缺けているものは辯證法的理解である。氏はゴットルから影響を蒙つたと自ら告白されている。曰く「、、物の有用性ないし效用によつて、その物が使用價值であると、特に力

說せしめるにいたつたのは、われわれの個人的な理解の過程を云へば、『資本論』の敘述そのものではなく、却つてゴットルの理論であつた。」(一〇四頁)なお安部氏の批判については本論第三節の(註二五)參照。
(註二二)エンゲルス著「共産主義原則」、マ・エ全集、第三卷、四〇七頁。
(註二三)エンゲルス著「空想的社會主義と科學的社會主義」、マ・エ全集、第一二卷、五六三頁。

(二)

しからは「資本論」は如何に労働の二重性の辯證法的展開を追求しているか？ だがこゝで先ず簡単に労働の二重性の何たるかを述べるとする。

A 綜括 商品の生産に際して、労働は、一方では、合目的な・有用的な、特殊の形態における人間的労働力の支出であり、かゝるものとしてそれは使用價值を創造する。しかるに労働は、他方では、生理學的な意味での人間的労働力の支出として同等な人間的労働或いは抽象的・人間的労働であり、かゝるものとしてそれは商品價值を創造する。

商品に含まれている労働は、使用價值に關聯しては質的ののみ意味をもつが、價值の大きさに關聯しては、それは質としてはもはや「質のどん詰まりとしての人間の労働」(menschliche Arbeit ohne Weitere Qualität)以上のものを有たず、したがつて量的ののみ意義をもつ。

されば使用價值に關聯しては労働の如何にして及び如何なる(Wie Und Was)と云ふことが問題であるか、商品價值に關聯しては労働のどれだけ(Wieviel)と云ふことが、換言すればその時間的繼續が、問題である。

使用價值としての商品は有用的労働と自然的素材との結合したものである。——人間と自然との間の物質代謝＝資料變換。ウリアム・ベテ、のいわゆる「労働は富の父であり土地はその母である。」しかるに一方、價值としての商品は單なる同等な種類の労働凝結である。

B 使用價值と價值との二律背反(對立的運動)——一定時間に得られる使用價值と價值との量的不比例(逆比例)

——は、労働の二者鬭争的性格から、すゝんでは生産力(の變動)が有用的労働とのみ關係することから、生ずる。生産力なるものは元來、有用的・具體的な労働の生産力であつて、それは一定時間内における合目的・生産的な活動の作用度を規定する。したがつて、労働生産力の變動↓有用的労働の作用度の變動↓使用價值(生産物)量の變動。(正比例の關係)

しかるに生産力の變動は價值で表示される抽象的労働とは「絶對的に全く無關係」である。蓋し價值において労働の具體的・有用的な形態が捨棄されるや否や、労働の具體的・有用的形態に屬する生産力(その大きさ及び變動)も又捨棄される。だから同じ労働は、生産力が如何に變動しようとも、同じ時間内には常に同じ大きさの價值を生み出す。

で、生産力の増大によつて使用價值、量を増大せしめ得るにしても、いまましこれが労働時間の減少をとまなせば、價值量は減少する。(個々の使用價值の價值はもちろん減少する。)逆に生産力の低下によつて使用價值量を減少せしめるにしても、いまましこれが労働時間の増大をとまなせば、價值量は増大する。(個々の使用價值の價值は

増大する。)

C 「労働の二重性」—— 価値という範疇——の歴史性

使用価値を創造する労働、有用的労働は人間と自然との間の物質代謝をいとなみ、それは「富の父」である。かゝる労働はすべての社会形態から獨立せる、人類生存のための自然的條件である。(そして使用価値の超歴史性) 超社会性がこれと關聯する。) しかるに価値を創造する労働、抽象的労働は、労働のある特殊な社会的形態である。それは一つの社会關係に屬する。

されば、自給自足——無交換の農民の自然經濟においては、使用価値は生産されるが、価値は生産されない。「富の父」としての有用的労働は、フリードリッヒ・リストも認めるように「既にソロモン王がアダス・スミスよりも遙か以前に考へついたことである。」(註一四) しかし問題はむしろ古代のソロモン王が価値を生産する抽象的労働——古代にも商品生産が存したかぎり——に氣付き得なかつたということである。

だから、商品価値を創造する労働は生理的意味での人間的労働力の支出(人間の腦髓、筋肉、神経、手、等々の生産的な支出)として等質性をもつていただけでは、なおそれは価値において自己の表現を見出すとはいえない。即ちこれがためには分業と私有財産とを根底とする商品生産という一定の社会關係が、しかもその相當程度の普及が前提されねばならぬ。かゝる社会においてのみ、はじめて生理學的な意味での等質的労働が価値を形成し、かくして「商品の二因子」に對應するところの「労働の二重性」が確立する。(單なる等質的労働は古代の農民自然經濟にもあつた。) 何故か? 蓋し商品生産のかんりの支配下においてのみ、はじめて「一定種類の労働に對する無關心」が生じ、これは資本主義社会において労働の選擇及び移動の自由とともに完成される、そして価値を形成する

ものとしての「抽象的労働」という範疇はその現實的客觀的基礎をもつのである。

要するに価値をつくる抽象的労働、したがつて商品において統一されたる労働の二者闘争性は、商品生産特にそれの完成としての資本制生産という一定の社会關係を基礎としてはじめて成立する。いわばそれはかゝる社会關係の表現である。(これはまた、「資本論」劈頭の商品の性質に關聯してゐる。)(註一五)

(註一四) 「國民經濟學體系」、改造文庫譯、上巻、二二七頁。なおマルクスは次のように註して曰く「フリードリッヒ・リストは、有用なるもの・すなはち使用価値の・創造を助けるかぎりでの労働と、富のある一定の社会的形態を・すなはち交換価値を・創造するかぎりでの労働と・の間の差異を理解することができなかつた。けだし彼のの主我的な實際的な頭には總じて理解するといふことは縁の遠いことであつたから。そこで彼れは近代の英國の經濟學者たちはエジプトのモーゼの單なる

三

しからは、前節にみた如き「經濟學を理解するための樞軸」としての労働の二重性は、更に「資本論」の敘述のすゝむにつれて如何に展開、具體化していつたか? いまこれを詳論するを得ないが、最も基本的な部面についてこのにそのいくつかを論ずるとしよ。

一 商品から貨幣への轉化(「資本論」第一卷、第二篇、第一、二、三章)

商品の二因子、使用価値と価値との對立が労働の二重性、具體的・有用的労働と抽象的・一般的労働との顯現であ

労働の二重性とその展開

ることはすでにみたところであるが、しかるに商品の一般的に流通するにつれて次第に使用価値と価値との対立は商品の體外にその表現を見出す。即ち商品のうちにあつた価値は商品から自己疎外して貨幣のうち自己の定有を獲得する。かくして商品のうちにふくまれていた使用価値と価値との対立は商品と貨幣との対立へと外化する。(註一六)

二 労働過程と価値形成Ⅱ増殖過程。「資本論」第一卷、第三篇、第五章」
商品は貨幣に轉化したるが、更に貨幣は剰餘価値を生産することによつて資本に轉化する。しかるに剰餘価値の生産は生産過程における労働過程と価値形成Ⅱ増殖過程との對立を基礎にして行われる。

労働過程 労働者は自己の労働を商品において表示するためには彼は先ずそれを使用価値において表示せねばならぬ。だから資本家が労働者に製作させるのは特定の使用価値Ⅱ財である。しかるに使用価値Ⅱ財の本性よりして、その生産は、したがつて労働過程は、特定の社會的形態から獨立している。それは人間と自然との間の物質代謝である。(こゝで第二節の具體的労働の項を想起せよ。)——尤も資本家のための労働過程は次の二つの獨自性、即ち

(一) 資本家の統制 (二) 生産物の資本家への歸屬という獨自性をもつている。
価値形成Ⅱ増殖過程 だが資本家は使用価値の生産を自己目的として使用価値を生産するものではない。使用価値は交換価値の物質的基礎即ち擔い手としてのみ生産される。されば資本家は(一)一定量の価値を有する商品を生産しようとするが、しかも(二)その生産のために必要とされる諸商品の価値總額よりもより大きな価値を有する商品を生産し、したがつて価値ばかりでなく剰餘価値をも生産しようとする。

我々はすでに幾度も商品そのものが労働の二重性の顯現としての使用価値と価値との統一であると述べたが、これと對應して商品の生産過程が労働過程と価値形成Ⅱ増殖過程との統一であることをみる。即ち一方労働過程において

作用する労働は使用価値を生産するところの有用的労働であつて、その運動は、質的に考察され、その特殊な仕方様式において考察され、目的及び内容の側面から考察される。が、他方価値形成Ⅱ増殖過程において作用する労働は抽象的労働であつて、その運動は量的にのみ考察され、問題なのは労働がその作業に要する時間だけである。

「ひとは見る、——さきに商品の分析から得られたところの、使用価値を創造するかぎりでの労働と価値を創造するかぎりでの同じ労働との間の區別は、いまや、生産過程の相異なる側面の區別として現はれといふことを。

労働過程と価値形成過程との統一としては、生産過程は商品の生産過程である。労働過程と価値増殖過程との統一としては、それは資本制生産過程であり、商品生産の資本制的形態である。」(註一七)

三 不變資本と可變資本。「同じ時點における労働の成果の二面性」、即ち生産過程における舊價值維持と新價值附加。「資本論」第一卷、第三篇、第六章」

生産過程において労働は一方その具體的・特殊的・有用的な屬性(使用価値をつくる有用的労働)においては、生産手段の価値を生産物に委譲し、生産物において維持し、他方その抽象的・一般的な屬性(価値をつくる抽象的労働)においては、生産手段の価値に新價值を附加する。

詳言すれば、労働の二重性からその成果(生産物価値の形成)の右に述べた如き二面性が生ずる。そして、この成果は二重の労働の結果ではなく、新價值附加と同時に、舊價值委譲が行われる。(イ)舊價值委譲は具體的労働の結果である。蓋し棉花と紡錘、絲と織機、鐵と鐵砧、のそれぞれの価値が綿絲、綿織物、鐵器に委譲されるのは、紡績、織織り、鍛冶という特定の労働過程を離れては不可能である。しかるに(ロ)生産手段の価値への新價值附加は、特定の具體的・有用的労働の結果ではなくして、抽象的労働の結果である。蓋し紡績労働者は鍛冶工となつても彼はや

はり一労働日によつて彼の材料に新価値を附加するであろうから。だから、紡績労働者の労働は、その抽象的・一般的な屬性においては、人間的労働力の支出としては、棉花と紡錘との価値に新価値を附加し、そして、紡績過程としてのその具體的・特殊的・有用的な屬性においては、それはこれらの生産手段の価値を生産物に委譲し、かくしてそれらの価値を生産物において維持する。同じ時点における労働の成果の二面性はかようにして生ずるのである。

「労働の單に量的な附加によつて、新価値が附加され、附加された労働の質によつて、諸生産手段の舊諸価値が生産物において維持される。同じ労働の——その二面的な性格の結果たる——この二面的な作用は、種々の現象の上に手にとるやうに現はれる。」(註一八)

そして資本の不変資本及び可變資本との區別は生産過程の一面としての価値増殖過程の立場からなされるところである。曰く「労働過程の立場からは、客體のおよび主體的諸要因として・すなはち諸生産手段および労働力として・區別されるところの同じ資本構成諸部分が、価値増殖過程の立場からは、不変資本および可變資本として區別される。」(註一九)

なおこれに關聯して資本の有機的構成における技術的構成と価値構成との統一も含蓄深く理解するべきである。即ち資本の技術的構成とは生産過程で機能する質料の側面からみられた生産手段と労働力とをえの資本の分割の比例——充用される生産手段の分量と他方ではその充用のために必要な労働量との間の比率を意味し、資本の価値構成とは価値の側面からみられた不変資本または生産手段の価値と可變資本または労働力の価値即ち賃銀の總額とをえの資本の分割の比例を意味するが、前者が労働過程に、後者が価値形成に増殖過程に照應し且しそれぞれを反映していることは明らかであろう。マルクスは、「私は、資本の技術的構成によつて規定され且つその諸變化を反映する限りでの資本

の価値構成をば、資本の有機的構成と名づける。」(註二〇)と云つては、かゝる意味での資本の有機的構成が労働過程と価値形成に増殖過程との統一としての生産過程に照應し且つ關係することは云うまでもなからう。

四、素材視點と價值視點。「資本論」第二卷、第三篇

マルクスによる社會的總資本の再生産の分析はこの問題に關するケネーの「經濟表」以來の最大の業績であり、「極めて重要にして且つ獨創的なもの」(註二一)であると稱されている。しかもこの理論の「基礎的前提」(註二二)たるものが、この分析における二つの立場——素材視點と價值視點——であることは周知の如くである。マルクスは再生産論の冒頭に述べて云う。「當面の目的からいへば、再生産過程はWを組成する右部分の價值代置(Wertersatz)並びに素材代置(Stoffersatz)の立場から觀察せらるべきである。」(註二三)即ち素材代置とは社會的總生産物をその現物形態にしたがつて、(一)生産手段生産部門、(二)消費資料生産部門の二部門に分けることを意味し、又價值視點とはこれらの部門の各々における生産物をその価値の要素にしたがつて(一)不変資本(C)、(二)可變資本(V)、(三)剩餘価値(M)の三部分に分けることを意味する。そして今こゝにあらためてかゝる二重の視點が労働の二重性の一層の具體化、擴充にはかならぬことを銘記すべきである。即ち簡單なる商品の分析によつて得られた商品の二因子——労働の二重性の檢出こそ、社會的總資本の再生産並びに流通を分析するための立脚地をあたえたのである。この場合、有用的労働——使用価値が二部門分割(素材視點)に、抽象的労働——価値がC+V+M分割(價值視點)にそれぞれ照應し合うことは明らかであろう。さればこそ「資本論」の著者自身が、労働の二重性に關して「諸事實の徹底的理解は、この上に立たなければ不可能である」と稱した所以である。(註二四)

五、市場價格と市場價值。「資本論」、第三卷、第二篇、第一〇章

労働の二重性とその展開

抽象的労働の對象化によつて市場價值(更に市場價值の一層の具體化としての生産價格)はつくられるが、それが市場價格として實現しうるためには、一方その商品にふくまれた具體的労働の有用性が證明されなければならない。かく抽象的労働と具體的労働とは對立しつゝ、しかも販賣換言すれば市場價值の實現(市場價格の成立)過程において統一されている。

使用價值の實現は消費によつて行われるが、使用價值をつくる労働の有用性は交換(販賣)によつて證明され、又その過程は同時に抽象的労働(價值)の實現する過程でもある。かようにして使用價值と價值と、又有用的労働と抽象的労働とは絡み合いつゝ交換過程において統一されている。この統一はもしも商品が販賣されない場合即ち使用價值の證明が社會的に行われないうち、特に過剰生産恐慌において破られる。矛盾は尖鋭な形態をとつて發現するが、しかも恐慌はこの矛盾を強力的に統一する。かゝる商品價值の實現における労働の二重性の展開が三でみた社會的總生産物の再生産——それは一面においては社會的總生産物價值の實現過程でもある——と關聯し合うことは云うまでもなからう。(註二五)

上來論じた労働の二重性の具體化の諸事例は「資本論」中の代表的のものについて極めて簡單にみたところである。問題はむしろそれらの事例にみられた労働の二者鬭争的性格の具體化が如何に相互に關聯しつゝ、然も枝となり細分化して「資本論」全體を構成しているかということであるが、かゝる根本的問題についてはいまこゝに詳論する準備も餘裕をもたない。小稿はたゞ労働の二重性と其の展開を素描し、その學問的意義を反省したまでである。價值法則の眞の認識への出發はかくして可能とされるであろうが、價值法則獨特の意義の學說史的、方法的再考察は更に續稿において試みる所存である。

(註一六)貨幣の成立を價值形態の必然的な發展によるものとして説くのがマルクスの貨幣論の著しい特徴であることは云うまでもないが、これは價值形態それ自身が商品に内含される矛盾を外的に表示するからである。例えば簡單な價值形態に關して述べて曰く「商品のうちに包みこまれてゐる使用價值と價值との内的對立は、一の外的對立によつて、すなはち、二つの商品の關係——そこでは、その價值が表現されるべき一方の商品は直接には使用價值としてのみ意義をもち、それで價值が表現される他方の商品はこれに反して直接には交換價值としてのみ意義をもつところの、二つの商品の關係——によつて、表示される。」(「資本論」第一卷、三二九頁)しかるにヒルフカーディング、カウツキー等の貨幣論の根本的誤謬は貨幣成立の必然性を價值形態の發展からひいては商品の二因子——労働の二重性から説き得なかつたことである。ヒルフカーディングについては、「金融資本論」第一篇、第二章、貨幣の必然性カウツキーに「Sozialdemokratische Bemerkungen zur Uebergangswirtschaft, Leipzig, 1918. 第七章貨幣、參照。

(註一七)「資本論」第一卷、五一七—一八頁。なお價值の實體が抽象的労働であることが檢出されるのは單に第一節のいわゆる蒸溜法(商品からの使用價值と労働の具體性の捨象)によるものと考えられるにしばしばマルクス批判者のみならず

労働の二重性と其の展開

解説者によつてもこの點が誤解されやすい。價值の實體としての抽象的労働は生産過程における労働過程と價值形式の増殖過程との統一の立場より遡及して考察されることによつて却て正しく把握されう。

(註一八)「資本論」第一卷、一一五頁。

(註一九)同、一三二—一三三頁。

(註二〇)同、一三六五—一三六六頁。

(註二一)レーニン著「カール・マルクスとその學說」、ナウカ社刊、二三頁。

(註二二)レーニン著、河野重弘氏譯「市場の理論」、二四頁。

(註二三)「資本論」第二卷、改造社版、三五二頁。

(註二四)なお素材規點を生産力表現、價值點を生産關係表現と看做す山田盛太郎氏(「再生産過程表式分析序論」)に對する豊田四郎氏の批判(資本蓄積論の課題)、「中央公論」昭和二年六月)及び豊田氏に對する安部隆一氏の批判(「最近『資本主義論争』の報告と討論」「時論」同、一〇月、一九—二五頁)がある。

(註二五)商品價值の實現過程(販賣)における労働の二重性の統一についてはすでに「資本論」第一卷の若干箇所においてもより抽象的にはあるが述べられてゐる。例えば第一篇第二章交換過程、において曰く「、、諸商品は、みづからを諸

価値として實現しうる前に諸使用価値たる實を示さねばならぬ。けだし、それらに支出された人間の労働は、それが他人にとつて有用な形態で支出されてゐる限りでのみ計算に道入るからである。ところが、それが他人に有用であるか否か、従つて、その生産物が他人の諸欲望を充たすか否かは、ただ諸商品の交換のみがこれを證明することができる。」「(二八二—三頁) また、同じく第三章第二節流通手段の箇所で「市場の胃の腑」の問題として提起されていることも記憶されることであらう。(三二七頁) なおこゝから商品価値を規定する「社会的必要労働時間」の「社会的必要」を以て必要の方面をも顧慮せるものと看做す見解がうまれやすいが、その妄見たることは再説するまでもない。かゝる妄見においては価値(市場価値)の成立と価値の實現(市場価格の成立)との間の過程上の差異——一方は生産過程、一方は流通過程——が無規され、又使用価値と価値、有形的労働と抽象的労働との對立が抹殺されそれが「調和」されてしまふ兩者はそれぞれ統一物であつて同一物ではない。統一は對立の上に立ち「調和」とは異なる。しかもかゝる謬解は今日に至るも跡をたゞぬ。(高田保馬氏著「労働価値説の吟味」、四五頁。高橋正雄氏「マルクネ」『日本政経研究』昭和二年七月、六二頁) 奇とすべきである。なお安部隆一氏の使用価値即物観(本論第一節註一、参照)の非辯證法的性格よりしては到底市場価値の實現過程における使用価値

との對立・統一は理解されることはできぬ。これ又、一面的謬見とすべきである。
一九四八—一九四九

俵 ぶ る ひ 内藤光備著

解題 幸田成友

解題

本書は林若吉氏の遺書賣立に際し、自分の入手した半紙判寫本で、本文三十一丁前附一丁後附三丁計三十五丁より成る。本文は漢字片假名交りで毎半丁十四行、一行二十五六字より三十三字に至る。文字拙劣言ふに足らずといへども、本書脱稿後僅々二年餘に抄寫せるものなることは、轉寫の都度に増加の傾ある誤謬を少からしめたと稱して宜からう。筆者は涼竹陣人とあるだけで氏名未詳、鶴府城の南麓松月亭で執筆せる旨識語に見えるから、或は羽前國鶴ヶ岡の住人か。

著者内藤光備字は子興は柳がもとのあるじと稱し、御代官の手代を職としたことは、本書の序跋によつて容易に知られるが、それ以上の経歴は不分明である。同人の自序に「申江の吏隱」とあり、申江は地名らしく思はれるが、それが今の何れの地に當るか考へ得ぬ。

著者の字は子興であり、さうして柳がもとのあるじに漢字を宛てれば松月亭となる。筆者涼竹陣人が字を子成、號を松月亭といったことは、識語の末にある三箇の朱印の第三と第一とによつて證明せられる。兩者の間に何等かの關係がありはせぬかとの想像がそれからそれへと馳せる。然し我等は妄りに想像を逞しうしてはならぬ。飽くまで史實

俵 ぶ る ひ

一九 (一九)